主 催 ：一般社団法人 岡山県社会福祉士会

「罪を償う」とは、どういうことか？ 「更生」とは、なにか？
本企画は、更生を支え、誰もが安心して共に生きる地域づくりのために、企画しました。

人は 自分の中に 作り上げた 「牢獄」 から いかに自由になれるか

Reaching For Life Beyond The Walls

LIFERS

ライファーズ――終身刑を超えて

映画上映会＆映画監督坂上香さんのお話

2018年2/10（土）

13：00開場

※先着順 定員260名

参加費無料

西川アイプラザ

5F 多目的ホール

（岡山市北区幸町10-16）

≪プログラム≫

13：30～13：45　坂上香 監督による挨拶

13：45～15：15　「LIFERS ライファーズ 終身刑を超えて」上映

15：20～16：30　坂上香 監督によるトークイベント

坂上香 （さかがみ かおり）

ドキュメンタリー映像作家/NPO out of frame 代表/一橋大学客員准教授。TV 番組の制作に9年間携わり、当事者家族による死刑廃止運動、治療共同体、修復的司法、ドラッグコート、コミュニティアプローチなど、オルターナティブな暴力・犯罪への対応方法に関する一連の番組を手がける。2004年に自主製作ドキュメンタリー映画「Lifers ライファーズ 終身刑を超えて」、2013年に「トークバック 沈黙を破る女たち」をプロデュース・監督。生きづらさを抱えるコミュニティ(暴力を受け、何らかの社会的支援を必要とする人々)と、写真や身体表現を使った協働表現活動「メディア4Youth」も展開。著書：『癒しと和解への旅 犯罪被害者と死刑囚の家族たち』(岩波書店 1999)、『ライファーズ 罪に向きあう』(みすず書房 2012)。現在、国内の刑務所を舞台にしたドキュメンタリー映画「プリズン・サークル」の編集中。

共催： 岡山弁護士会/CAP おかやま/おかやま司法福祉ネット

後援（予定）：岡山県社会福祉協議会/岡山保護観察所/岡山県保護司会連合会
岡山県精神保健福祉士協会 他

お問い合わせ先 岡山県社会福祉士会 〒700-0807 岡山市北区南方2-13-1 きらめきプラザ7階
TEL086-201-5253 FAX086-201-5340 Mail itou@okayama-public-lo.jp

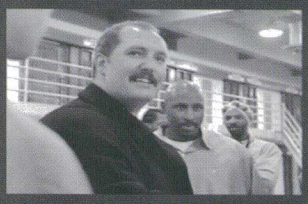
Reaching For Life Beyond The Walls

LIFERS

LIFERS（ライファーズ）
＝
終身刑、もしくは無期刑受刑者

ライファーズ――終身刑を超えて

「社会復帰してゆく受刑者が、再犯しないように働きかけること。これが、殺人という取り返しのつかない罪を犯した自分にできることだと思う。」――――――レイエス・オロスコ（LIFERS）



2004年ニューヨーク国際インディペンデント映画祭
《海外ドキュメンタリー部門》 最優秀賞受賞作品

Reaching For Life Beyond The Walls
LIFERS
ライファーズ――終身刑を超えて

★TV取材で出会った犯罪者の更生施設

TV番組の取材で、犯罪者の更生施設「アミティ」（米国拠点）を訪れてから10年になる。その間、様々な出会いがあった。罪を犯し、刑務所から出所し、社会の中で生き直そうとしている人たちとの出会いである。

社会復帰施設に暮らす薬物依存の若者、保護観察中のアーチスト、弁護士をめざして大学で学ぶ少女、カウンセラーとして研修中の人々……。その多くは十代前半で薬物に手を出し、他人に危害を加え、逮捕や服役を繰り返す「凶悪」な犯罪者だったという。しかし、私の目の前にいる彼／彼女らは、「凶悪」という言葉からは想像もつかないほど穏やかで優しい。「あなたが変わりたい、と思えるようになったきっかけは何だったの？」。そんな質問をどのぐらいの人に投げかけてきただろう。そして、彼／彼女らはきまってこう答えるのである。「LIFERS（ライファーズ）のおかげだよ」。

★LIFERS（ライファーズ）とは

受刑者が300万人を超える米国。そこには現在13万人あまりのLIFERS（ライファーズ）（終身刑、もしくは無期刑受刑者）が存在する。彼らは殺人や強盗など「凶悪」な罪を犯し、「更生不可能」のレッテルをはられた人々であり、社会から忘れられた存在である。

更生施設「アミティ」では、カリフォルニア州の刑務所内プログラムで、そんなLIFERS（ライファーズ）を積極的に受け入れてきた。「なぜ犯罪を犯すようになったのか」。受刑者たちはこの問いに徹底的に向き合い、罪の償いを、新しい生き方を、模索していく。

LIFERS（ライファーズ）の一人は次のように語る。「釈放されるかどうかが問題なのではなくて、受刑者である私たちは、自分のなかに作り上げた『牢獄』から解き放たれる必要がある。たとえ刑務所から出られなくとも、変わるチャンスが与えられれば、今までの生き方にしがみつく必要なんてなくなる。それに、いつの日か出られるかもしれない、という希望さえあれば、頑張り通せると思う」。

★暴力や犯罪にどう向き合えばいいのか――

「凶悪」な罪を犯したLIFERS（ライファーズ）とはどのような人たちなのだろう。被害者に対してどのような思いでいるのか？殺人のような取り返しのつかない犯罪に対する「償い」とは？ 他の受刑者や外に暮らす家族との関係は？ 塀のなかで一生過さねばならないかもしれないLIFERS（ライファーズ）にとって、日々の支えとは？ また遺族にとって事件からの年月とは？ 私たち社会は、暴力や犯罪にどう向き合えばいいのだろう。本作品は、このような幾つもの疑問から生まれました。

映像を通してLIFERS（ライファーズ）に出会い、暴力や犯罪に私たちそれぞれがどう向き合えばいいのかを、一緒に考えてみませんか？

――――――坂上 香（「LIFERS（ライファーズ）――終身刑を超えて」監督・プロデューサー）

❖本作品では、仮釈放委員会や刑務所での様子を絡めながら、インタビューによって受刑者たちの心の内を引き出し、それらを丁寧に描いている。「LIFERS ライファーズ――終身刑を超えて」は最初から最後まで見逃せない。

――――――アノー・コッター
（ニューヨーク国際インディペンデント映画祭選考委員）

❖「犯罪に厳しく！」というマントラを唱え、安易に票集めをしようとする政治家が多いですが、対症療法的に刑務所を超満員にしても社会のためになるのかというと、大いに疑問です。この作品から何よりも強く伝わってくるのは、真の更生を目指す受刑者たちや、そんな彼らを支える人々の誠意。成果を挙げるのは大変ですが、こういった作品が少しでも彼らの努力の後押しになれば嬉しいです。一見他人事のように見えても、我々の子どもたちが安心して行動できる町づくりは、皆で犯罪の原因を理解することから始まるのだと思います。

――――――ピーター・バラカン（音楽評論家）

『LIFERS　ライファーズ――終身刑を超えて』　2004／ドキュメンタリー／カラー／91分／ビデオ／日本
製作・配給：out of frame　協力：The Lifers 映画支援プロジェクト／AMITY Foundation／Neo P&T
プロデューサー・監督・編集：坂上 香（映像ジャーナリスト）
撮影：南 幸男（映画「自転車でいこう」）　録音：森 英司（映画「ディスタンス」）
音楽：ロジャー・スコット・クレイグ（映画「ペリカン文書」）　ナレーター：マヤ・ムーア（ジャーナリスト）
http://www.cain-j.org/Lifers/index_J.html